

# 序 クラゲの魅力は“ミスマッチ”



独立行政法人 水産大学校 教授  
水産学博士 **上野 俊士郎**

クラゲは不思議な魅力をもつ生きものです。

透明で柔らかく、存在感の薄い体、どこに向かって泳いでいるのか、ハッキリしない行動。それでいて、きびしい自然の海でクラゲはしたたかに生きています。現在とほとんど同じ形をした彼らの先祖は、すでに数億年前の海で生活していたと言われていました。クラゲはけっして頼りない生きものではなく、人類よりもはるかにたくましい生きもののようです。

「美しい薔薇には棘がある」と言われるように、クラゲは弱々しい柔軟な体をもつ一方で、「刺胞」という毒針をもっています。クラゲの不思議な魅力は、頼りない外見としたたかな生態とのミスマッチにあるようです。

加茂水族館は、鶴岡市街から西に10数km離れた庄内海岸の磯浜に建つ小さな水族館です。1964年にオープンし、庄内の海で採集した地場の魚を中心に熱帯魚などを飼育展示してきましたが、建物施設は古くなり、客足は減少する一方で、1997年には年間入場者数が9万人まで落ち込み、存続が危ぶまれるほどでした。ちょうどそんな時、サンゴ水槽に泳ぎ出た小さなクラゲの展示がきっかけで「加茂水族館のクラゲ展示」が始まったのです。

クラゲの展示数が増えるにつれ、入場者数も増加、8年後の2005年にはほぼ倍増して17万人を超え、そして現在クラゲ展示種数は34種と、ダントツ“世界一のクラゲ水族館”となったのです。

まさに、加茂水族館は「クラゲ」で再生したのです。

加茂水族館の「クラネタリウム」では映画館のような暗い部屋にクラゲたちが浮かび上がっています。そのクラゲたちは館外のことを忘れさせてしまう“別世界”を醸し出しています。冬の大波に立ち向かう日本海庄内海岸の荒々しさと対照的な優雅なクラゲたちが、見事に展示されています。加茂水族館を取り巻く環境と、クラゲはまたミスマッチに見えます。加茂水族館の現在の繁栄はこのクラゲとの“ミスマッチの魅力”をうまく活用した結果でしょう。

このたび、村上龍男館長がクラゲ展示当初から撮影し続けた飼育・展示クラゲ百数十種の中から、水族館近くの海、「加茂海原」で採集した51種を収めた『写真集』を出版されました。この写真集に接してクラゲによる加茂水族館の“再生の謎”が解けた思いがします。

いずれの写真もクラゲのミスマッチの魅力をいかんなく表現しています。この写真集は、クラゲによる加茂水族館の“奇跡の再生”を証す一つの記録集です。そしてまた、小さな地方水族館から発信した将来の夢あふれる希望のメッセージでもありましょう。

本写真集は、刺胞動物の系統分類学の第一人者である京都大学の久保田信博士の種同定などにより、「クラゲ写真集」の芸術性にしっかりした科学的基盤が与えられ、さらにクラゲの魅力を引き立たせています。

それでは、クラゲの“ミスマッチの魅力”を優雅な姿を通して存分にお楽しみください。

日本海の荒波を受ける加茂水族館を遠く想いながら、桃花香り始めた下関にて。

